

# 自閉スペクトラム症者における“かわいい”の機能に関する研究

大野, 愛哉

<https://hdl.handle.net/2324/5068156>

---

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (心理学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏 名 : 大野 愛哉

論 文 名 : 自閉スペクトラム症者における“かわいい”の機能に関する研究

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、自閉スペクトラム症（以下 ASD）者の“かわいい”の機能について、認知課題遂行およびコミュニケーションに着目し検討を行い、ASD 者への臨床的・教育的支援への示唆を得ることを目的とした。第 I 部（第 1～4 章）では、先行研究を概観し、本研究における着眼点を整理した。まず、ASD 者の“かわいい”について先行研究において検討が行われていないことを受け、定型発達（以下 TD）者における“かわいい”の先行研究を「対象の属性」「認知」「感情」「行動」「機能」の 5 つに分類して概観した。その結果、“かわいい”の機能として、視線と関連が深い①認知課題遂行機能、②コミュニケーションの促進機能が得られたため、本研究では視線や視覚的注意に着目した上で、この 2 点の機能を中心に検討することを目的とした。

第 II 部（第 5～9 章）では、ASD 者の“かわいい”の機能について検討を行った。まず初めに、ASD 者には言葉の定義や感情のラベリングの独特さといった障害特性があることを受け、第 5 章では ASD 者における“かわいい”の定義を明らかにすることを目的とし、インタビュー調査を行った。その結果、ASD 者の“かわいい”は、「見る・触る・聞く・身に着ける等によって引き起こされる、近づきたい・そばにおいておきたい、よく見たいといった接近動機や、落ち着く、好きといった感情を伴うポジティブ感情であり、情動調整や動機付け、精神的健康度の向上やコミュニケーションの促進機能を持つ」と定義された。TD 者では“かわいい”感情の中でも「接近動機」が認知課題パフォーマンスの向上に影響を与えることが示唆されているため、本定義より“かわいい”は ASD 者においても TD 者と同様、認知課題のパフォーマンスを向上させる可能性が考えられた。また機能について、ASD 者のみで見られたものは「コミュニケーションの促進」および「精神的健康度の向上」であった。

第 6～7 章では、ASD 者の“かわいい”が①認知課題遂行に与える影響について、特性把握および個別事例による検討を行った。その結果、興味関心の限局性と関連する ASD 特性が高い ASD 者は“かわいい”刺激を見た際に視覚探索課題のパフォーマンスが向上することが示された。このことから、これらの特性が高い ASD 者は、“かわいい”によって注意や集中力、課題へのモチベーションが引き出されるため、認知課題遂行が円滑になると考えられた（第 6 章）。また個別事例検討より、“かわいい”は、接触によって気持ちをポジティブにし、行動始発の制御および過集中の抑制に繋がること、興味関心と深く関連する“かわいい”は他者に受け入れられることで自己受容を促すことが示された（第 7 章）。以上より、ASD 者における“かわいい”の認知課題遂行機能が示され、ASD 者の学習支援に“かわいい”を用いることの有用性について示唆を得た。

第 8～9 章では、ASD 者の“かわいい”が②コミュニケーションに与える影響について、特性把握および個別事例による検討を行った。その結果、コミュニケーションにおいて重要な、顔に対する視線について ASD 者は自身が“かわいい”と評定した刺激においてのみ、TD 者と同程度、目の

付近を注視していた。このことから、アイコンタクトなど相手の目を見ることに困難さがある ASD 者にとって、“かわいい”ものは目を見やすい、コミュニケーションをとりやすい刺激である可能性が考えられた（第 8 章）。また個別事例検討より、“かわいい”ものにネガティブな気持ちを付与するといった自己の外在化を行うことにより、他者との対人関係における洞察の深まりや、コミュニケーションスキルの向上に繋がること示された（第 9 章）。以上より、“かわいい”には ASD 者独自のコミュニケーション向上機能があることが示唆され、“かわいい”ものを媒介として会話を行い ASD 者のコミュニケーションスキルの向上や内的理解につなげるといった、コミュニケーション支援における“かわいい”の有用性が示唆された。

第Ⅲ部（第 10～11 章）では各章の研究について概要をまとめ、本研究の成果について総合的な考察を行った。本研究で得られた ASD 者の“かわいい”の 2 つの機能に共通する要因として、“かわいい”が ASD 者の限局された興味関心の一部であることが考えられた。元来、ASD 者の興味関心の限局性といった障害特性は日常生活に支障をきたすものとされてきたが、この興味関心の限局性に“かわいい”という言葉が用いられた場合には、本研究で得られたような認知課題遂行やコミュニケーション促進の機能をもたらすことが考えられた。

本研究の今後の課題は“かわいい”の対照語を用いた比較検討や生理的・神経学的指標を用いた検討を行うことにより、ASD 者の“かわいい”のみで見られる機能について明らかにすることである。本研究の成果および独自性として、①ASD 者への支援について検討するにあたり、先行研究において皆無に等しい研究領域である“かわいい”に着目し、ASD 者独自の機能について示した点、②“かわいい”というキーワードを用いて、興味関心といった ASD 特性を「強み」として生かせることを示した点、③ASD 者の内的世界の理解につながる知見を示した点が挙げられる。本研究の成果は今後、学習支援場面、コミュニケーション支援場面において、学習教材に“かわいい”を取り入れる、現在確立されている体系化されたコミュニケーション支援（SST 等）を進める主体に“かわいい”対象を取り入れるといった新たな ASD 者支援プログラムの開発に繋がっていくと考えられる。